

熊押猿押物語

小川製品事業所

安芸管轄 仙谷事業所の終山に伴い、24、25年にかけて、小川事業所への移転が行われた。小川川沿いに森林軌道が伊尾木貯木場まで敷設されており、事務所は花より11km、職員の住宅はさらに2km上流の谷間にあった。職員約60人、トガワラなどの天然林の木材生産や木炭の生産が盛んに行われていた。4林班に天然林は少なかったが、3林班、5林班では優良な天然林や旧藩道林を製品生産した。軌道終点にはインフラと山内軌道とを組み合わせて高度にかせぎ運送していた。今、林班に残る細長い樹帯はインフラの跡。林内にも軌道跡などが残っている。当時の暮らしは、独身者には共同飯場があり、自家発電による電気も通り、ラジオ放送も聴くことができた。ちなみにNHK第1は入らず、NHK鹿児島とラジオ放送が受信できたという。当時のラジオは1台12,000円程、日給430円、日曜日の休日は比較的早く、土曜日には軌道を自転車で安芸まで下り、安芸まで1杯飲んで、月曜日は3時に起きて小川の炭山仕事をしていた。小川事業所は、2003年終山し、畑山の松谷事業所へ移転していた。

大久保生れの精太郎さんは、小川から実家へ戻る際は、小川→榎ヶ谷の瀬→ハツ杉森→横八町の歩道→杉ノ瀬→久保。またはハツ杉森→馬路境→揚つる→久保。途中、走ったりもしたが、2時間程で行き来していた。信じられないくらい驚きの脚力だ。

奈比賀の由来
熊押、猿押一体は安芸市大字奈比賀。奈比賀は「並川」とも記されていた。小川(おごう)川、伊尾木川、名村川が並び流れることに由来する。



藤内 丘陵の上の平地
戦後、用拓が入り、農業や酪農を営んでいた。小川山中腹には水を引いた水路跡があり、水を直交手掘りのトンネルで運んでいる。今は迷路のような道が入りこみ、抗大な柚子畑になっており、番犬が何頭も飼われ、柚子畑を守っている。ここに入植していた人たちの子どものために奈比賀小学校藤内分校が、29年に南校。時代が移り南拓者の山とともに、41年南校となる。柚子畑の中に、そこだけ杉の木が、一列に並んでいるところが学校跡。



精太郎さんが山谷や小川で働いている頃は「朝は朝星、夜は夜星」というような働き方を、あたりのように行っていた。

木炭車
森林軌道とよばれる機関車の動力は、資源の乏しい山沖日本人が考えた木炭車であった。炭生機に早朝より制動手が木炭をつめて、ガスを発生させて動かしていた。(タウシーと同じ原理) 戦後しばらくして、ディーゼルに移った。(トリスバスなど全木炭だ)

この山域は安芸担当管内。30、40年代、安芸管轄には、安芸、大井、明夜島、井口の5つの担当区があり、管内すみずみまでよりきり細かい森林管理が展開されていた。



ハツ杉
標高1000mを超える深山ハツ杉森には多くの民話が残る。昔も今も「ハツ杉」と呼ぶ「ハツ杉森のよび」といわれる怪奇現象や、熊師の兄弟と鹿おうとした頭と尻がハツある化物と大菩薩黒金王というお守りの鉄砲玉で退治し身を守った話など。この化物からハツ尾山と呼ばれていたこともあったという。

熊押山 1林班から始まる安芸森林管理署の国有林の中で6林班が、2番となっている。安芸市史によると昭和31年のハツ杉森「私下り」の記述がある。これは安芸市発足の合併に伴う赤字解消のためにハツ杉森の天然林を「私下り」行なわれたという。

河又柄尻山 5
安芸管轄署OBの米田精太郎さん(伊尾木) 当時の暮らしを伺い記しました。2017.5

河又柄尻山 3
関門 日山の神

河又柄尻山 2
猿押山

河又柄尻山 1
熊押山

猿多し杉
文化財資源備蓄林 文化財などの文化的価値がある伝統的木造建築様式の伝承に必要な大径材(黒杉)を供給するために設定されている。約82x77-1。

猿多し杉
猿押山に樹令500数十年、胸高直径6.6m、樹高46mの猿多し杉と呼ぶ大樹あり。数十年前までは猿押山、熊押山は猿多し山、熊多し山と呼ばれていた狩猟地であった。平家一族、小川左馬之進主従数名は、山田町小川箱谷の里に落ちのび、狩猟として生計を立てていたが、ある時、家来の一人が、主の怒りにふれ、この猿多し山に分けり、自ら果てた地があるという。それ以来、ここを通る人は必ず不思議なことが起こるので、その霊を鎮めるために、小川を作り杉を植えて示したものであるという伝説がある。

山には一人では入られぬ

朝は朝星、夜は夜星



小川川はウギヤアユの宝庫だ



一人一日六合に下らないくらい食べていた。小麦、外米が主食。

